

企画展 ろっかし縄文1万年の美

～縄文人が愛した土器文様の変遷～

令和4年7月16日(土)～9月25日(日)迄

六ヶ所村には、約1万年にわたる縄文遺跡群があり、各年代を代表する土器が多数出土している。今回の企画展は、草創期の隆起線文土器から亀ヶ岡式土器(大洞式土器)までの各年代の縄文土器や縄文人が愛した土器文様の変遷の展示をとおして、縄文人の想いに迫る。



縄文時代草創期 (約16,500年～11,200年前)

約1万年前にしてこの美しさ



隆起線文土器
表館(1)遺跡



隆起線文

この隆起線文土器は、尖底土器で、美しい形をしている。37本の細い粘土紐の隆起線文が見もの。口縁部のギザギザや上部の5本の一部ギザギザにデザインされた文様がしゃれている。千曳浮石層(約12,700年前)とその上位から出土。全体の形や全国的な広がりが見られる重要資料。県重宝に指定されている。



縄文時代早期 (約11,200年前～約7,000年前)

定住化とムラが形成されたころの土器

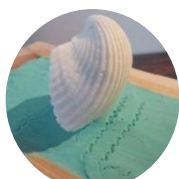


物御台式土器
千歳平(13)遺跡

約9,000年前から温暖化し、海面が上昇し始め、貝塚がつくられ定住化が進む。サルボウガイやアカガイの貝殻の縁で、ギザギザの貝殻沈線文をつけている。妊娠を表すと考えられている渦巻きや四角形の沈線文がつけられている。



貝殻腹縁文と沈線文



サルボウガイと貝殻腹縁文



渦巻文



表館X群土器
表館(1)遺跡



押圧文



羽状縄文

約7,000年前の早期の終わりの土器で、縄ひもを波形に押し付けた押圧文が上部に、下部には縄目の羽状縄文がつけられている。この遺跡からは波形文が特徴的な北海道産の中茶路式土器も出土しているので、北海道との交易・交流があったことがわかる。



中茶路式土器



微隆起線文の間に押圧文



縄文時代前期 (約7,000年前～約5,500年前)

尖底土器から円筒土器への大転換



円筒下層式土器



津軽の斜縄文



南部の多軸絡条体

前期の後半(約5,900年前)になると突然、尖底土器にかわって円筒土器が出現する。土器文様は、津軽地域の斜縄文、南部地域の多軸絡条体の文様、六ヶ所村泊(1)遺跡では単軸絡条体の文様が多くみられる。定住化が進み、地方色豊かな文様ができた。



縄文時代中期 (約5,500年前～約4,100年前)

大集落と円筒土器をつくった人たち



円筒上層式土器
富ノ沢(2)遺跡



羽状縄文



カエル人間？

富ノ沢遺跡(2)遺跡は、国内最大級の馬蹄形の大集落で、華やかな円筒土器文化として栄える。

円筒上層式土器の上部は、粘土ひもや串による線や点描で文様をつけ、胴部は羽状縄文など、様々な文様が見られる。土器上部には、カエルやイノシシの顔、へビに見えるものがある。土器文様には、縄文人の祈りが表現されている。



縄文時代中期 (約 4,500 年前)

南の影響を受けた土器が出現



榎林式土器
富ノ沢(2)遺跡



円筒上層 e 式土器
富ノ沢(2)遺跡



大木 8b 式土器
富ノ沢(2)遺跡

富ノ沢遺跡の大集落では、他地域との交流・交易が進むと、独特な土器が生まれた。その榎林式土器には、東北南部の大木 8b 式土器に見られる樽のような丸い形と渦巻文様がみられ、北東北の円筒上層 e 式の上部の開きや線描もみられる。大木式土器の要素を取り入れながらも、円筒土器文化圏の先人の土器づくりを引き継いでいることがよくわかる。

東北北部の円筒土器文化と東北南部の大木式土器文化の二つの文化の融合により榎林式土器が生まれた。



入組文



磨消縄文

十腰内式土器には、入組文や磨消縄文がつけられている。土器は、厚手から薄手へ、大型から小型化へと変化し、壺や甕、鉢、注口、香炉形の様々な形の土器がつくられるようになる。日常生活用の粗い土器と儀式や祭祀用のていねいなつくりの土器に区別される。



縄文時代中期末葉～後期 (約 4,300～3,000 年前)

特異な埋葬：二回葬と土器棺



大木 10 式甕棺土器
富ノ沢 (2) 遺跡



十腰内 1 式土器棺
大石平 (1) 遺跡

縄文時代を通して埋葬は土葬であるが、中期末葉・後期の一時期だけ、青森県を中心に二回葬(石棺墓に埋め、数年後掘り出して洗骨し、甕棺に入れ埋葬する)が行われていた。中期末葉の富ノ沢 (2) 遺跡からは、大木 10 式(磨消縄文)の土器棺が出土し、後期の大石平遺跡や上尾駱遺跡、弥栄平遺跡からは沈線文や浮き上がるような沈線文、赤色顔料を塗られた土器棺が出土している。



縄文時代後期 (約 4,100～3,000 年前)

六ヶ所村の地名が付いた沖附(2)式土器



沖附(2)式土器
沖附(2)遺跡



コ の 字 の 縄 文 と
磨 消 縄 文

今から 4,100 年前になると気候が寒冷化し、富ノ沢遺跡の大集落は衰退し、弥栄平(2)遺跡や沖附(2)遺跡などの東北南部の大木式土器文化を持った新たな集落が出現する。始めに縄文をつけ、沈線文で模様を描き、その一部を磨り消して、全体の文様づけをしている。沖附(2)式土器の磨消縄文は、「コ」の字や「一」の字を浮き上がらせる構図をとり、見方によっては、違う模様に見える点が興味深い。



縄文時代晩期 (約 3,000 年前～約 2,200 年前)

熟練した職人の技が光る土器



大洞式土器
上尾駱 (1) 遺跡



雲形文



雲形定規

今から約 3,000 年前になると寒冷化が進み、墓は集落から離れる。上尾駱(1)遺跡からは土壇墓 21 機からは、亀ヶ岡文化の代表的な遮光器土偶や漆塗りの櫛、ヒスイの首飾りや鼻曲り土面が出土。

大洞式土器(亀ヶ岡式土器)の皿形土器には、複雑な曲線の雲形文がみられる。内側は化粧土を塗り、表面をつるつるに仕上げている。精巧な縄文人の土器づくりは、まるで熟練した職人の技のようだ。



縄文時代後期 (約 4,100～3,000 年前)

南に広がる北東北の縄文文化



十腰内 1 b 式土器
鷹架遺跡

今から約 4,000 年前の縄文後期になると、尾駱沼北岸域に新たな集落の大石平遺跡や上尾駱遺跡が出現した。十腰内式土器や鐔形土製品、甕棺などの儀礼に係る遺物や集落から離れた祭祀場の墓域も発見された。



動物や獣面、人体文など

縄文人の祈りが込められている土器



人体文付土器



土偶の模様付土器



獣面付土器